

27AB-pm215

血小板機能検査に用いる ADP 試薬の評価 (4)

清水 美衣^{1,2}, Andrea R. J. ANAS¹, Francis S. LEGARIO¹, 水谷 拓也¹, 服部 真奈¹,
松尾 昂法¹, 若菜 雅世¹, ○明壁 博彦¹, 今西 進¹, 山本 正博², 原田 健一^{1,3} (¹名城大薬,
²横浜市脳卒中神経脊椎セ, ³名城大院総合学術)

【目的】動脈血栓症の一次および二次予防には抗血小板療法が有力な治療戦略となり、その薬効評価には血小板凝集能検査が中心に施行されている。日本血栓止血学会のアンケート調査によれば本検査の測定条件は施設によって異なり、多施設合同の臨床試験は困難となっている。本研究の目的は、血小板凝集能測定条件の標準化を目指し、その際に用いられる ADP の試薬間差を明らかにすることである。

【方法】血小板凝集能試験で汎用されている ADP 試薬として、MCM 社、アークレイ社 (アグリパック)、クロノログ社、シスメックス社の試薬を用いた。また、標準品として、シグマ社の ADP、AMP、アデノシン、アデニンを用いた。それら試薬を、水または生理食塩水 (大塚) や付属の希釈液に溶解し、血小板凝集能検査を行った。また、親水性相互作用クロマトグラフィー (HILIC) による HPLC 分析を、TSKgel amide-80 分析用カラム (東ソー) およびフォトダイオードアレイ検出器 (島津) を用いて行った。

【結果と考察】HPLC 分析の結果、クロノログ社と MCM 社の ADP 試薬において、他社の試薬と明確な差がみられた。この試薬間の差異は、生理食塩水に溶解した条件においてのみ観察された。また、血小板凝集能検査においても同様の傾向が観察されており、試薬間差は多施設での共同試験に影響を及ぼす可能性を示唆した。現在、その原因を確認中である。